

シリーズ「これからの介護の新しい視点」全3巻

「いまを生きるを大切に」 ～ICFの視点によるこれからの介護～

第1巻	「介護の新しい視点ICF」	約24分
第2巻	「利用者のニーズと食事・入浴・排泄におけるケア」	約38分
第3巻	「ICFの視点によるケアプラン」	約27分



【販売価格】

VHS・DVD 各巻¥26,250

セット価格／全3巻¥78,750(税込・送料別途)

監修 社会福祉法人 浴風会
認知症介護研究・研修東京センター
主任研修主幹
諏訪 さゆり

協力 医療法人財団 青山会
介護老人保健施設「なのはな苑」看護部長
松浦 美知代

【企画意図】

いまICFという視点が介護の分野に取り入れられ、大きな注目を集めています。ICF(International Classification of Functioning, Disability and Health)とは、WHO・世界保健機関が、2001年5月の第54回総会において、高齢者や障害者を理解する上で、人間の生活機能と障害の分類法として採択した新しい考え方です。生活機能とは「人間が生活する上で使用しているすべての機能」です。そこにはいわゆる身体の機能も精神の機能も、さらに環境の因子も含まれています。そして生活機能を身体系の生理的機能(心理的機能を含む)である「心身機能」と身体の解剖学的部分の「身体構造」、課題や行為の個人による遂行に関する「活動」、生活・人生場面へのかかわりに関する「参加」に分類し、さらにそれら生活機能に影響を及ぼす背景因子として外的・内的因子をそれぞれ「環境因子」「個人因子」として整理しています。これらの構成要素はダイナミックに相互作用するので、1つの要素が変化すると他の複数の要素も変化することが考えられます。

高齢者や認知症患者のもつプラス面を重視したICFの考え方をケアプランに取り入れ、実際のケアに生かしている、神奈川県三浦市にある介護老人保健施設「なのはな苑」の日常生活をモデルに、ICFの視点とは何かということ、認知症介護研究・研修東京センター主任研究主幹諏訪さゆり先生の解説を交えて分かりやすく表現して行きます。

ケアの方法は、状況に応じて日々変化するものです。事例は正しいものだけを取り上げるのではなく、誤ったケースも取り上げ、なぜ誤ったのかということ、ケアが改善されて行く様子を具体的に明示します。利用者の生活歴や環境をアセスメントし、利用者の自己実現を支援するケアプランを実行して行くことにより、自立へ向けての介護を促すことが狙いです。

【主たる対象】

ケアマネジャー、介護福祉士、ホームヘルパー、福祉系大学、短大、専門学校、介護保険事業所、介護老人保健施設、看護系大学、看護師養成校、作業療法士(OT)・理学療法士(PT)、栄養士、社会福祉士養成施設校、老人福祉施設、老人保健施設、在宅介護支援センター、地域包括支援センター、医療介護支援センター、訪問介護ステーション、自治体介護保険課、市区町村保険福祉センター、社会福祉協議会など

企画
制作
発売

東京シネ・ビデオ株式会社

〒103-0022 東京都中央区日本橋室町1-8-8 ちばやビル6F

電話 03-3242-3151 FAX 03-3242-3182

<http://www.tokyocine-video.co.jp>

(ご注文はFAXにてお願い申し上げます)

シリーズ「これからの介護の新しい視点」全3巻

「いまを生きるを大切に」～ICFの視点によるこれからの介護～

第1巻 「介護の新しい視点ICF」

第2巻 「利用者のニードと食事・入浴・排泄におけるケア」

第3巻 「ICFの視点によるケアプラン」

〔監修者の言葉〕

社会福祉法人 浴風会 認知症介護研究・研修東京センター主任研修主幹 諏訪さゆり

私たちケア専門職は利用者にできないことやわからないことがあると、「高齢だから仕方ない」「認知症の人は困る」などと言うだけにとどまりやすいのが現状です。しかし、ケア専門職がどのように介護したらいいのかわからず困っている時、利用者はもっと困っているのです。このように今を懸命に生きている利用者を支えていくためにICFの視点を学び、自己実現を目指して今を生きる利用者の思い、意思を見つめていきましょう。そうすることで、みなさんの施設でも利用者理解が深まり、個別性を尊重した介護を具体的に検討できるようになるのです。



〔協力者の言葉〕

医療法人財団 青山会 介護老人保健施設「なのはな苑」看護部長 松浦美知代

認知症介護の難しさは、「自分でない他者の思いを汲み取り、その人が望む生き方支えるという矛盾したありかたをどのように調和的に整えられるか」にあります。ICFの視点による介護は、経験則や推測による介護から脱却させ、客観的に課題解決へと導いてくれました。生活機能を充分発揮できる環境を整え、利用者の意思・意欲を大切にすICFの視点による介護は、認知症高齢者と介護者に笑顔と生きがいをもたらしてくれるでしょう。



〔内 容〕

第1巻 「介護の新しい視点ICF」

1. 認知障害をとらえるICFの視点
2. 医学モデルと社会モデルによる介護
3. ICFの視点を活かしたケアの実践
4. ICFの分類をケアに活かす

老人保健施設「なのはな苑」で生き生きと働くMさん(84歳)、とても認知症障害があるとは思えません。しかし自宅に帰ると全く何も出来ず、一日中ベッドに寄りかかって座り込んでいます。デイケアで通所してきた場合も同様です。目はうつろで、額に皺を寄せ所在無さげに椅子に腰掛けています。ところが2階のユニットケアへ連れてこられると、突然目が輝き出し、スタッフと共に食器洗いや食事の後片付け清掃の仕事を黙々とこなします。なぜこのような状況が起こりうるのでしょうか。このようなMさんの事例を通して、諏訪さゆり先生に、ICFとは何か、ICFの視点に立った介護とはどういう事かについて詳しく説明してもらいます。

第2巻 「利用者のニードと食事・入浴・排泄におけるケア」

1. ICFの視点から見直す食事における介護
2. ICFの視点から見直す入浴における介護
3. ICFの視点から見直す排泄における介護

食事、入浴、排泄は三大ケアと呼ばれています。どうしたら「食べてくれる」のか、どうしたら「入浴してくれる」のか、どうしたら「うまく排泄できる」のかを、同じく「なのはな苑」に入所しているNさん(88歳)を中心に何名かの入所者の場合を事例として、検証してみます。いかにして利用者のニードを的確にとらえそれを介護に生かすかを、諏訪さゆり先生がICFの視点に立って解説します。

第3巻 「ICFの視点によるケアプラン」

1. ICFの障害のとらえ方
2. ICFの視点を活かすケアプランの作成
3. 本人の可能性を活かす介護

ICFの視点によるケアプランを作成していくには、障害をどのようにとらえ、それをいかに解決していくかのプロセスを理解する必要があります。ICFでは、従来の「問題志向型」に加えて「目標志向型」の考え方にも着目し、この二つの考え方をケアプランに導入していくことを勧めています。「なのはな苑」の実例から食事をしないOさん(87歳)とタオルを噛むTさん(90歳)を題材に、松浦看護部長を中心にスタッフ会議を行い、ケアプランを作成していくプロセスを追いかけてみます。最後に諏訪先生が、ICFの視点でケアを行うメリットについて解説します。

〔参考文献〕 「ケアプランに活かすICFの視点」 日総研

〔スタッフ〕

製作 横川 元彦 演出 福原 進 製作主任 横川 幸彦 ナレーター 沢田 敏子
プロデューサー 長崎 平人 撮影 遠藤 一彰 編集 京極 宣暁 音響 シネマサウンドワークス